
幻獣ぱれっと!

橘 猫音

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

幻獣ぱれっと！

【Nコード】

N3859Z

【作者名】

橘 猫音

【あらすじ】

彼の住む北ファイセクト大陸には、いや、正確には彼の住む世界には、「魔物」が住む。魔物の種類は人間に有害な「境獣」と人間に無害な「幻獣」に分けられる。境獣に対抗する為に完成させられた技術、「境獣転生」で転生させられ、人になった獣は人にとって奴隷にするのに都合が良く、やがて人間たちは「幻獣」までもをその的にするようになる。

身近で転生した幻獣が奴隷として働かされている。そんな光景に耐え切れなくなった男が、行動に出る。

序章：俺が今から始める事は

…見ていて気分を害す

幼い女の子にムチを振るい、田を耕させているのだろうか、労働を強いらせている30代後半の男が家から見える。

息をきらしながら田を耕す麻布の服の少女の頭には犬のミミが付いている

察するに彼女はメフィストの転生人種だろう

ここ北ファイセクト大陸には、いや、正確にはこの世界には魔物がいる。

魔物と言っても多くの人が想像するだろうス イムやド キー）には同じ言葉が入る）みたいな人を襲うようなことしか頭のない野蛮な生物のことではない。

「幻獣」と呼べば思い浮かぶだろうか？

そう、神話に出てくる「ユニコーン」とか「ペガサス」とかそういう類いの動物だ。

幻獣は変異種も含め、1360種以上の種族がいる。

幻獣たちは決して人の手の加わった土地には決して踏み込まない。これは古くからの人間と幻獣の暗黙の了解だった。

そう、幻獣たちは決して踏み込まない。

だが、1360種もの幻獣とは別に分類される、人間に害を与える獣、そう、それこそス イムヤド キーみたいな獣、「境獣^{きょうじゅう}」がいる。

境獣は幻獣たちのおよそ三分の一でどの480種程度の種族しか居ないが、大きな魔力、物理的な力を持つ境獣は一匹でも人間の大きな驚異になる。

幻獣も境獣も勿論「獣」だ。どちらも人間とは姿も言葉（多くの獣は鳴き声、テレパシーである。また、ワルキューレなど一部例外もある）も違う。

君には「なら何故さっきの犬ミミ少女は人間の少女の姿をしていたのだろう」という疑問が残るだろう。

詳しく話せば長くなるだろうから手短かに話していこうと思う。

十数年前に、ロイルマナレスト大学幻獣学部教授、ウエルト^{II}ダイルが、境獣を殺さずに安全化する為の方法として「境獣転生」の方陣を完成させた。

境獣転生とは、簡単にいとうなんだ、境獣を人間にしちまおうって呪文だ。

まあ長年の研究で境獣の魔力や力学的エネルギー、容姿の特長を完全に封印することは出来ないことは解つたらしいが。

手順も簡単に説明しようと思う。

まずは境獣の魔力を弱らせなんらかの方法で転生方陣の中心に誘導、移動一（ヴァジユラなど一部の大きすぎる境獣の場合は対象を中心に方陣を書く場合もある）させる。

その後拘束魔法を唱え、境獣を拘束し、転生魔術を唱え、方陣からドーム形に白い光が出て、暫く鳴き声や喘ぎ声、他にも色々聞こえるが、3分後には光も消え、方陣の中心には人間が倒れている、とそんな感じだ。

この方法で「人」になった境獣は魔力に限界があり、一定ベクトルのエネルギーを越えると、動けなくなってしまう。つまり、人間に逆らうことができない、人間より弱く見られる彼らは劣性人種とみなされ、奴隷として労働を強いられる。

そこで色々な大陸のお偉いさんが考えたわけだ

「転生人種は力も強く、労働に使えるぜ、でも転生にはリスクがかい、どーにか簡単に確保出来ないか」

ってな

んで此処からが都合主義本番な展開だ。

某年のある日、親とはぐれ、町に迷い込んだ子供のクリウス（熊に似た幻獣）がパニックになり、暴れている所に転生術士が通りかかって転生魔術をかけたら、くまのフードコートを着た女の子が出来たっていうニュースが流れた。

そんな事件があったもんで大陸間協議なんかがあつて、激論の末、

森に立ち入って幻獣も人間にして奴隷にしまおうって計画が出来た。

そんなこんなで…いまの現状がある。

考えただけでイライラする。

そこで幻獣学部卒の俺が動かない訳にはいかないだろうって事で、ちよつとばかり行動にでることにした。

そう、保護団体に入る事にした。

今ちよつちいなって思ったる？

ちよつちくなんかない。俺が入る幻獣保護団体は…

転生人種入団可能の特殊ギルドだ。

おっと、もうこんな時間か、ギルドのある町までの出発は明日。

詳しくは明日歩きながら話す事にしよう。

移動中：俺と黒猫の話

ガチャリ

鍵もかけた…っと

暫くはここには帰ってこないから戸締まりはしっかり…っと

さて…今は早朝三時、まだ日も昇ってない、寒くて凍え死にそうだ…

だが今でなければ今日中に町まで到着出来ない。

さて…それではさらば懐かしの我が家よ。

荷物は最小限に抑えたから足取りも軽い。

そつえば昨日ギルドについて詳しく話す といっていたのだったな。

今日はどうせ歩くだけだ。少し詳しく話そうと思う。

俺が今から行こうとしている町、ルーザンマードルはここ、カヌ村から約徒歩17時間の所にある。

ルーザンマードルは市場や最高クラスのレストラン、服屋など、商業が盛んで、観光でも人気のある町だ。

だが、俺は勿論、美味しい料理を食べたり、お洒落をするためにわざわざ行く訳じゃない（ちょっと観光もしようと思ってるのは秘密

だ)。

俺がルーザンマードルに行くのは「ギャザリングギルド ルーザンマードル支部」に所属する為に申請を出しに行くのだ。

ギルドというのは、境獣の討伐依頼、転生依頼などを受け持つ町営施設だ。

転生が嫌いだって昨日言ってたじゃないか と思う人も多いだろう。

ただギルドに所属したいだけなら、自分の村にもある。

だが、大抵のギルドは転生依頼を受け、境獣の転生を行った後の境獣人種は、奴隷として競りにだす。

更に、お偉いさんからの「幻獣を5〜6匹転生して売ってくれ」という不正な依頼すら普通に受ける。

俺の村でもそうだった。

だがルーザンマードルのギルドは違う。怪我をした幻獣を保護、必要に応じて転生し、転生させた幻獣はルーザンマードルの住民として登録し、保護している。

さらに境獣の討伐依頼は一切受け付けず、境獣はすべて転生し、住民登録を行う。

更に、普通のギルドには転生人種の入団は許可されない。

だが、ルーザンマードル支部は、転生人種もギルドへの受け入れを

許可し、依頼を与えている。

そのうえ、転生人種保護条例を作り、通常人種と対等の生活を約束している。

しかもギルドの受付はレッドドラゴン種（超ド級の幻獣）から転生した、龍の羽の残っている朱い髪の綺麗なお姉さんが担当しているそうだ（決してそれが目的ではない）。

他の地域から奴隷から解放されるため、亡命してきた転生人種に対しても受け入れ体制をとって、生活を保護している。

最高じゃないか、ルーザンマードル。俺もルーザンマードルのギルドで…

つて…ん？ なにか… なんだ？

なにか黒い、黒い…布か？ なにやら異質な物が草むらに落ちて（？）いる。

小型の魔式ナイフをとりだして近付く。

一歩… 一歩…

黒い物体を上から見下ろす。

黒い猫の体に 黒い猫ミミ 黒い猫の尻尾が2本…

「なんだあ…布じゃなくてケット・シー（猫の小型幻獣）かあ…つてええ！？」

思わず声を出して自分にツッコんでしまった。

倒れてる？ し…死んでるのか…？ おーい…って声かけても解らないか…

そうかぁ…せめて埋めてあげるか…

持ち上げようと手がケット・シーに触れたとき

「こう…」

いつ…生きてるっ！ 急いで…えーと… あー そーだ！

「神よ！この者の命尽きるのは余りにも早いとお思いになるのならば力を貸したまえ！」

ヒールの呪文が発動し、ケット・シーを澄んだエメラルドグリーン
の帯状の光が取り巻く。

良かった…成功だ。

「にえ…」

取り合えずこのケット・シーはギルドまで連れていこう。

振動を与えないよう、ケット・シーをそっと抱き上げる。

いやぁ…まさか行き道で幻獣を保護するとわなぁ

などと考えながら、森に差し掛かる前まで来た。

幻獣を保護した達成感に浸りながらケット・シーを見る。

「それにしてもこのケット・シーよく眠ってるなあ…つてええ!？」

思わず声をあげてしまった。

俺は気付いたら、11歳位のネコミミの付いている、黒いワンピースを着た幼い黒髪の白いのは肌位だろう、そんな容姿の女の子を…お姫様だっこしていた。

しかも目を擦って…お目覚め真っ最中の…

「ふああ…にやあ…ここは…?」

固まる俺 どうすればいい。　なんでだ?　俺は転生魔術なんてか
けてないぞ?

「にやつ?　なにこれ、にやあ、下ろしてよお!」

腕の中でじたばたする女の子　固まる俺　じゃなくて

「あつ　ゴメン」

慌てて地面に下ろす俺。

「お兄さんがここまで連れてきてくれたのにかにゃ?」

取り合えず訳を話そう。聞きたいことは沢山あるが、質問はそれか

らだな。

「ああ、うん、ルーザンマードルまで行く途中に（以下略）」

ヒールを使ったこと、拾った時の状況 みんな話した。

「なるほどお、にゃあ、お兄さんは命の恩人だね！ ありがとうにゃあ

あ お兄さん」

可愛い… 可愛いぞ… つとイカンイカン質問を忘れる所だった。
む、誰だロリコンだって言った奴は！

まずは…この質問からかな…。

「ところで…お嬢ちゃん、ケット・シーが倒れてると思ってここまで連れてきたんだけど、なんでその格好に成ったの？」

ケット・シーの女の子は顔を伏せ、ふえ… くすん…といって目を潤ませる。

し、しまった… 地雷を踏んだか？ まずは質問を変える！ 名前
は？身長は？なんでもいいから早く変えるんだ！

「じゃ…じゃあ、お嬢ちゃん、どんなぱんつ履いてるの？」

墓穴を掘った。焦った俺の口からとっさに出た質問は「どんなぱんつ履いてるの？」だった。 ああ…終わった…

女の子が口を開く ああ…叫ぶのかなあ…俺は逮捕かなあ… 南無
三…運が悪かった…

「今日は私ぱんつ履いてないの…えへへ…」

「へ…?」

なにが起きたか解らず、ぽかんとしていると、ほら…と言ってネコミミの女の子はワンピースのスカートを捲り…涙目で微笑み、スカートを捲る姿は…これじゃあ俺が幼女をなんかのプレイで虐めるみたいじゃないか。これはこれで…興奮する…! じゃなく困る。誰だ、「このロリコンが! その娘に触るな!」とか言った奴は。失礼な。

「解った! 解ったから! まずスカートを下ろして!」

ずっと涙目でスカートを捲っている幼女を見ている訳にもいかないのでスカートを下ろさせる。

「う、うん…解った。」

といい、スカートを下ろす。まず…なんだ…えつと…この娘ももう大丈夫みたいだ。これ以上に関わつたらろくな事がない気がする。

「じゃあ、大丈夫みたいだし、俺はそろそろで行くけど…お嬢ちゃん、家まで一人で帰れるよね?」

じゃあね、といい、歩き始める。

だが…俺をあの子が お兄さん! と呼び止める。

「お兄さん…以外と冷たいんだね…」

ぐっ… 時間がヤバいんだが…しかし流石に罪悪感が募る。

「じゃ…じゃあ…お家まで送っていく？」

「ねえ、お兄さん、ルーザンマードルまで行くんでしょ？なら私も一緒に連れてってよ…？」

なにを言い出すんだこの娘は、一人で亡命したならそれは認められる。だが、俺がつれてきたと成れば…本来の彼女の主人に拉致罪で訴えられれば俺はギルドに所属出来ない。それこそ終わりだ。

「お、お嬢ちゃん？でも突然居なくなったらお家の人心配するよ？」

この娘は転生人類だ、奴隷として扱われる彼女を心配する人なんて… だが、なんとか回避しなければ。

「心配なんてしないよ…家族とはもう…もう会えないから…」

「…え？」

『もう会えない』この娘の言ったこの言葉には、「奴隷の私を心配する人は居ない」という意味は込められて居ないようだった。それには純粹に、「家族に会えない哀しみ」の気持ちしか入って居ないように感じられた。

「うん…さっきお兄さん、なんで私が人になつたか…不思議がつてたでしょ？ 話せば信じてくれるかも…辛いけど…話すね」

彼女はうつむかず、涙を堪えて話し始めた。

「私はね、半転生異常種なの」

半転生異常種 それはたしか、バハムートとか魔力がとてつもなく魔力が削りきれずに転生させたときに稀にできる、魔獣と人を自由に行き来できる、いわゆる「転生失敗」で出来る墜天種だったはず。

「私はね、ルク村の近くで転生魔術を受けたの、その時に、魔術士の人はめんどくさいからって私ともう一匹、2匹まとめて魔術をかきちゃったの。それで魔力の合計に足りなくて失敗して、私は半転生異常種になっちゃったの。使えないからって、人間からは捨てられて、森に帰ったら、転生魔術を受けたからって民族からも追放されたの。だから私は『失敗作』になったせいで家族とももう会えない…ふえっ…」

そこまで言って話し終えた彼女は泣き出してしまった。

はたしてルーザンマードルで半魔（半転生異常種）の転生人種を受け入れてくれるかは解らない、でも…だとしても

「解った。一緒に行こう。お嬢ちゃんを一人にしない、約束する。ちゃんと守るから。」

どちらにせよ、弱者を見捨てるような男にどちらにしるギルドに入る資格はない。彼女の頭を撫で、誓いをたてる。

「…ほんと？」

顔を上げた彼女と目があう。

「ああほんとだ。さあ、一緒に行こう。」

手を差し出し、彼女を立たせる。

「お兄さん…にゃあ…有り難う…えへへ…やっぱりお兄さん…いい人だったね…」

彼女は涙を拭い、微笑み、立ち上がり、「さ、お兄さん、いこう」と言い、歩きだす。

おう、と反応し、小走りに追いかける。

横に並んで、歩く二人を、優しい木漏れ日が照らしていた。

移動中：碧髪の弓師と大蛇の話

彼女と色々な話をしながら歩いた森を抜けた頃には、延々と続く彼女との問答のお陰もあって、俺も彼女もお互いの事を大分理解していた。

話しによると彼女の名前は人間の言葉に直すと「悠（果てしない、ゆっくりした）」という意味の言葉らしい。本名も名乗って貰ったが、難しくて覚えられそうにない。確か「ルティアメルラ：なんちやら」だった気がする。まあ到底覚えられないから、俺は彼女の事は「ユー（ゆう）」とよぶことにした。

ユーに俺の名前を教えたところ、必死に俺のあだ名を考えたあげく、結局名前の一部を取り「シユウにい」と呼ぶことにしたらしい。やはりある程度転生後の見た目に年齢は関係あるらしく（1億2000万年生きた魔物境獣が妖艶なお姉さんに転生したこともある、そこら辺は謎なのだが）、彼女の年齢は動物年齢にして1.7歳、人間年齢にして11歳、だそうだ。

更に、人間と幻獣の姿はある程度、自由に行き来出来る事も解った。そういえば、子供の頃は周りの人からは「シユウちゃん」なんてて呼ばれてたなあ、なんてしみじみとしていると

「シユウにい！ にゃあ！ 街だよ街！ おつきい街がみえるよ！」
ユーが言った。

確かに3kmほど離れた所の草原の真ん中に低い壁に囲まれた街の

ようなものが見える。

「今は…夜の10時か。以外と早く着いて良かったな、ユー」

「うん！ シュウにい速く！ 遅いよっ」

いつの間にか黒猫の姿になり、ぴよんぴよん跳ねながらかなりのスピードで走るユー

「走るなよ、転んでもしらねーぞ？ ！！ ユー！ あれは… あッ！あぶねえ！止まれ！」

「へへーん なにも無いところで転ぶほどバカじゃないよー」

ああ、遅かったか

後ろを見ながら走っていたユーは… 前が見えず不意に野生のボーティス（巨大な蛇の境獣）にぶつかり、思わぬ衝撃によりユーは黒猫から、少女の姿に変わる。

ボーティスは猛毒のキバを持つ大蛇の境獣だ。それこそ…ケット・シーなどキバに触れるだけで死んでしまうような。

「逃げろ！ 速く逃げるんだ！」

しかし、ユーが動くよりも速く、ユーは尻尾を巻かれ、締め上げられる。

「しゅ…シュウにいッ…くあっ…」

ユーが苦しそうな声で俺に助けを求める。俺は魔式ナイフをとりだし、拘束術を唱えようとすする、だが、遅かった。

「ユーーーーーッ!」

俺は叫ぶことしか出来ない。

ポーティスは思わぬ獲物に、毒の滴るキバをむき、少女の姿になったユーに巨大なキバを振り下ろし、キバがユーを貫く。

守れなかった…目を瞑る。キバがユーを…貫く。いや、貫くはずだった。

カカカカンツ その時軽やかな音がした。俺が目を開けた頃にはポーティスの固い鱗に何本もの術式矢（一定時間すると消える矢）が刺さっている。

キュイイツと甲高い声で鳴き、ポーティスがグネグネと動き、ユーは尻尾から放り出され、地面に叩きつけられる。

それとほぼ同時に太いポーティスの胴体の反対側の少し離れた場所から「向こう側の貴方！速くその娘を連れてこっちに！」と、凜とした女性の声が聞こえる。

何が起きたか解らず固まる俺。いや、今は考えている暇はない!!

一気に飛び出し、俺の方に逃げてこようとすするユーを抱き上げ、止まらず声のした方に走りだす。

人を抱き抱えたまま最も速く走れる格好、自分の足下だけを見て、前傾姿勢で走り続ける。

13秒程度走った所で人の影を前に確認し、止まる。

「はあっ…はあ… 助かりました… ありがとう…!？」

声の主をみて、述べている礼が一瞬止まる。

私を助けてくれたのは、「緑色のしなやかな髪の毛、揉み上げと後ろ髪を長く伸ばした、背中にエメラルドグリーンの身の丈程の大きさの翼を持つワイルドチャーム（緑とカーキの弓士用の服）を着た、銀の装飾の施されている弓を持つ、端麗な『美女』」だった。まあ正確に言えば俺を助けたのは彼女率いる魔法弓士団なのだが。

「礼は良いですから、速く結界の外に出てください。」

俺の足に弓先をむけ、美女が言う。気付かなかった、ハツとして見ると、いつの間にかポータイスを中心に転生方陣が描かれ、ポータイスには拘束術により発生した鎖が絡み付き、動きを封じている。ハツとして方陣から出る。

「それでおーケーです。では、コホン、神よ、哀れな獣に新たな身体と精神の反転を与えよ！」

美女が呪文を唱える。その瞬間、転生方陣の縁からマーカークリーンの光がドーム型に広がり、ポータイスを囲う。

ん？なんだろうこの違和感…

光…そうだ、出ている光の色だ。普通の転生方陣から出る光は普通の光だった。それに…この転生、鳴き声も喘ぎ声もその他色々も聞

こえない。

結局、何故なのが3分間考え通したが、結論にまでたどり着かなかった。

光が消え、方陣の中に倒れている人の姿が見える。

方陣の中心には、薄紫色のセミショートの髪の毛、鎧を着た、やや背の低い妖艶な女性が海賊の持つような剣を持って俯せで倒れていた。

「さあ皆さん、お仕事お疲れ様でした。大物を仕留めたのですから街に帰って…今夜は飲みましょう」

美女の呼び掛けに

「いいねえ！今夜は飲み明かそうぜ！」

「姉さん（あねさん）が行くなら俺も行くぜ！」

「お疲れえ！今日は美味しい酒が飲めそうだ！」

弓士団の面々がそれぞれ別々にいう。

「それから、転生させた娘はギルドまで馬車で運んでおいて下さい。」

そついいルーザンマードルの方向を向き、歩き出そうとする美女を引き留める。

「あっ…あの！さっきはこいつの事…助けて頂いてありがとう御

座いました。」

美女は礼には及びませんよ。と行って歩きだす。

「あつ…あの、貴女はルーザンマードルのギルド所属の方ですよね？ 話しとか聞かせて貰えませんか？」

更に引き留めた、が

「もし断ったら？」

真顔で放たれたその台詞に俺は、う… と息詰まる。

「ふふつ…冗談ですよ、貴方はルーザンマードルのギルドに所属するために移動していたのですか？ 付いてきて下さい。歩きながら話しましょう。」

ふふつ…と笑った美女に、はっ…はい！ と言って俺はユーを抱いたまま弓士団の中に交ざり、ルーザンマードルまでの道、俺は歩きながら、緑髪の彼女と話し始めた。

移動中：「小食マンティコアなお姉さん」と半エロ妄想

「私の自己紹介は以上です。」

取り合えず名前を聞いてみると、碧色の美女はご丁寧に自己紹介をしてくれた。彼女は、ルーザンマードル所属02転生小隊長。名前は「雲村鳴葉くもむらなるは」と言っただそうだ。ちなみに趣味はお菓子作りだそう。美人だし、料理も出来る…なんていうか…嫁にとりたい。勿論冗談だ、半分くらいは。

「非常に言いにくいのですが、私はまだ貴方の名前すらまだ聞いていないのですが。」

遠慮など微塵もしていない様子の彼女の台詞。そういえば、俺の方はまだ名前も名乗って無かったな。

「あつ…聞きっぱなしでしたね、すいません。」

許します と鳴葉さん。

「有難うございます…。俺は」

「にゃあ、シユウにいつていうんだよ〜」

いつの間にか、すっかり目を覚ましていたユーが俺の腕の中で楽しそうに笑っている。ちよつと待て

「いや…俺の名前は」

「成る程、『にい』は『兄』の意ですね。では私はシュウさんと呼ぶ事にしましょう。」

遮られた。俺の嫁…じゃなくて鳴葉さんの中で俺の名前はシュウで認識されてしまったようだ。

「はあ…あの、鳴葉さん。俺の事は呼び捨てで構いませんから。」

「それでは遠慮なく。それではシュウ、あらためて宜しく願います。」

なんだろう…なんていうか、「シュウ」がどんどん周りに浸透していく。まあいいか…

「それよりも、過去に踏み入るようで失礼かもしれませんが、その黒いお嬢さん、察するに血の繋がった妹さんでは無いようですが…お二人はどのような関係で？」

「にゃあ、私はシュウにいにすぐそ…」

下手な事を言われては困る。「すぐそこで拾われた」と言おうと聞いたユ一の口に手を被せる。モゴモゴと何かいい、じたばた腕の中で暴れるユ一。元幻獣とはいえ11歳の女の子。11歳に負ける俺ではない。暴れるユ一を取り押さえたまま

「ユ一とは昔色々ありまして、まあユ一は俺の義理の妹みたいなものですよ。」

在り来たりな台詞だったがなんとか誤魔化せた気がするぜ

「その『色々』が聞きたいのですが…まあいいでしょう。それともう一つ。失礼な話かもしれませんが、その黒いお嬢さんは、半魔です。すね。」

「半魔の何がッ…!!」

半魔の何が悪いんだ、そう叫ぼうとする俺を

「シユウにい、いいんだよ。ねえ、碧のお姉さん。半魔は街には入れないの？ 街には住めないことになってるのかな？ もしそうなら私もシユウにも街には入らない。シユウには守ってくれらるって誓ってくれたから。」

至って冷静な態度で制止するユー。だが言葉一つ一つに感情を込め、ユーが言う。 鳴葉さんは、俺の大声に、驚きを顔に出したが、すぐにいつもの冷静な顔に戻り、言う。

「先ほどの失礼な質問お許してください。本当に。ルーザンマードルでは勿論半魔の方も入街、移住できますのでご安心を。」

「うん、良かった。碧のお姉さん。」

二人の冷静なやり取りに、俺も我に帰る。

「あ、こちらこそ、取り乱してしまい、みっともない所をお見せして、すいませんでした。」

取り合えず謝る俺、許します、と鳴葉さん。こんなシリアスな場面で「許します」などと言う鳴葉さん。はあ…ちよつとばかり調きよ…いや、再教育の必要が…(笑)

くへへ…と妄想を膨らませていると、

「ところで碧のお姉さん、みたところ…っていつか明らかに転生人種だよね？ 元々はなんだったの？」

ニヤニヤしている俺を完全にスルーして、いつもの楽しそうな笑顔に戻り、ユーが言う。はあ、ユーもこのタイミングで転生の話を持ち出すとは…本当に空気の読めない奴ばかりだな。そんな悪い娘は二人まとめてお仕置きだn(r y

くへへ…とニヤニヤしている俺を見事にスルーして鳴葉さんが答える。

「はあ…いつかは来ると思ってましたけど、その質問にはあんまり答えたく無いのですよ。」

「うん、そっか。で？」

今日のユーは微塵も容赦が無い。はあ…とため息をつき、俺の玩具…いや、鳴葉さんが話し始める。

「実は私…マンティコア（ライオンの頭に鷹の爪、猛毒性のあるサソリの尾を持つ境獣）の転生種なんですよね。」

「へ？なんで話したくないんですか？ 確かにマンティコアは獰猛なイメージはありますけど…」

純粹に理由が知りたいので質問する。この話に地雷が潜んで無いことを信じて。

「まあ私はおしとやかを自負しているので、癡猛なイメージが気に入らないというのもありますけど…それより何と言っても嫌なのはマントイコアの『大喰い』のイメージですよ！確かに私の群れには一匹で討伐隊をすべと喰い尽くす猛将もいましたけど…私は少食な方だったのに転生した後と言えばマントイコアと聞いただけで大食い大会にチャレンジしてみないか等と話を持ち掛けてくる輩さえ…
(中略)」

はあ…しまった。自分の思いを延々と語るマントイコア鳴葉さん。かなり長くなりそうなので耳を傾けるのもそこそこにして妄想の続きをだな…くへへ…鳴葉さんにはこれをだな…そんなに赤くならなくても…この服をきてヨーグルトを口で…(ニヤニヤ)

「…と言つわけなんですよ、酷くないですか？」

話し終えた後、全てを吐き出したようにスッキリとした顔の鳴葉さん。

「ええ、そうですね、色々苦労されたんですね」

目を反らし生返事をする俺。

「そうだね」特にマントイコアが転生したって聞いただけで太っていると勘違いしてプロレスのヒール(敵役)にスカウトしてきたプロレス団体がいたってのは酷かったねえ。」

ユーは最初から最後まで真面目に聞いていたらしい。

「そうなんですよ。(以下略)」

鳴葉さんの熱弁を聞いているうちに、不意に前方が明るくなり、次第にざわざわという音も聞こえる。

「…だからして…っと、もう到着ですか… さて、着きましたよ。ここがルーザンマードルです。」

話したりなそうな鳴葉さんと弓士団の面々が、俺とユーより先にレンガのアーチをくぐる。鳴葉さんは此方を向き、

「シユウ、黒いお嬢さん、ルーザンマードルにいらっしやいませです！」

微笑み、小首をかしげ、先ほどまでより大分明るい口調で言う。

ユーが腕からすり抜け、「わおうい！」とよく解らない歓声をあげ、駆け出し、アーチをくぐる、それを追いかけるように、俺も小走りでアーチをくぐり、レンガの一軒家の多い街並みの中に一歩、足を踏み入れる。

この一歩から始まる、俺達の街での生活、ギルドでの新たな出会いに胸を膨らませながら。

(P・S・ユーも胸を膨らませていたと思うが、胸の大きさが変わってはいなかったのは言うまでもない。残念だ…)

到着後：紅竜のお姉さんとの「対面

「では皆さん、早々ギルドに報告に行つて、酒場で飲みましょう」
鳴葉さんが明るい笑顔で弓師団の面々に向かつて、声をかける。

「おおおおっ！ と弓師団から歓声上がる。

「今回は大物を仕留めたのですから、02小隊の以外にもギルドの中枢や、酒好きな仲間達も結構来るでしょう。これからギルドの仲間入りをするので、仲間との顔合わせも兼ねてシユウも一緒にどうですか？」

俺に向かつて微笑みかけて言う。 どうやら鳴葉さんは笑って話しかける時、小首をかしげる癖があるようだ。 ふむ…可愛いじゃないか… じゃなくて。

今は街の外での厳格な様子は窺えず、寧ろはたから見れば明るいムードメーカーのような存在にも見える。

「すいません、あの、大した質問じゃんですけど… 鳴葉さんの様子が街の外と大分違うような気がするんですけど、いつもあんな感じなんですか？」

「おおおおっ！と声を上げている弓師のうちの一人、背の高い男に聞いてみたところ。

「そりゃあ、鳴葉ねえは街ん中じゃあんな感じだよ。街の外じゃあ何があるか解らんからなあ」

とのこと。素直に笑ってれば最高に可愛いんだから弓師なんて辞めて俺の嫁になればいいん…いや、でもギャップがあつてこれはこれでイイな…これがギャップ萌えというやつか！（違うか）

「行きますよね？」

俺を急かす鳴葉さん。

自分をジラす俺に、早く入れてと俺を急かす…じゃなくて、返答を急かす。

「俺は勿論いいですけど、ユーはまだ未成年なんですけど飲み屋とが行つて大丈夫なんですかね？」

一応了解の返答のついでに街に入ってからひとしきり騒いだあとパタンと寝てしまった、俺の腕の中にいるユーを指差し一応質問。

「大丈夫ですよ。飲酒はダメですが、一応ジュースとかもありますし。うちの技術屋^{メカニック}も12歳ですけど普通に来てますし。でもあの娘は普通にお酒飲むので妹さんが真似しないよう気をつけてください
ね？」

成る程、一応ユーも連れて行けそうだな。

「解りました。因みに何時頃から打ち上げなのですか？」

因みに今は午前2時だ。今日の午後8時くらいからだろうか？

「今日の今から夜明けまでです。」

「え、でも俺今まで歩いてきて疲れ」

「では行きましょう。こちらです、付いてきてください。」

鳴葉さんは、話しを一方的に打ちきり、弓師団の面々に向かって「皆さんは先に酒場に行ってください。」といい歩きだす。困ったなあ… と思ったところだが、小走りに追いかける。鳴葉さんには今後も振り回されそうだなあ。あとユーにも。

深夜だからか、余り人がいない（灯りのついている家は何軒かあった。さっきの弓師団の方々の「うおおおっ！」は近所迷惑にはならなかったのだろうか？）街路を暫く歩くと、窓から電球の光が盛れている大きなレンガ建ての入り口の大きい建物の前に着いた。

「酒場つてここですか？ 随分お洒落つていうか、イメージと違いますね。」

正直な感想を述べる。

「違いますよ。ここはギルドです。それに酒場はもつと賑やかですよ。ふふっ…期待してて下さいね。」

と開いた木製の門をくぐりながら鳴葉さん。成る程、と相づちを打ちながら門をくぐる俺。

綺麗に磨かれた大理石の床に踏み入れた2〜3秒後…

「あつ！ 鳴葉？おつかえりーっ！」

明るい声が広い室内に響く。はあ、とため息をつき「帰ったわ」と

鳴葉さん。

「一応報告するから、ちゃんと記録しなさいよ?」

ロビーの方に歩きながら鳴葉さんが言う。

「はいはい、まあ鳴葉が無事に帰ってきたんだから成功なんだからけどね。りょかいだよ」

明るい声の出所には、ルーザンマードルのマネージャーの制服らしき服（黒地に赤の端麗なデザイン）を着た、深紅の髪を長く伸ばし、深紅の翼を持った、何て言うか…胸の豊満な、肌以外が全体的に真っ赤な女性が、満面の笑みでこちらに手を振っていた。

目を開けたまま唾を飲み、立ち止まる俺。これが噂のギルドマネージャーか…すごい破壊力だ…（ゴクリ）

立ち止ったままの俺を置き去りにして受付まで歩く鳴葉さん。

「第02転生小隊、ボーティスの転生を完了し、無事帰還です…つと、空音あんた、こないだ『鳴葉任務成功だよっ』って報告書にかいてマスターに怒られたばかりでしょ? 今日ちゃんと書きなさいよ。」

と鳴葉さん。ほいほい、と紅龍のお姉さん。鳴葉さんと俺との会話がいかにか他人行儀だったかが解る会話。くふっ…泣けるぜ…

静かに干渉していると

「およっ?そこにいるお兄さんはどちら様かな? お名前は?」

紅龍のお姉さんから呼びがかかる。今、ユーは寝ている。俺の正しい名前を可愛いお姉さんに覚えて貰うチャンスだ！

「あつ、俺ですか？俺は」

「シユウよ。」

うおおいつ…また邪魔が…だが俺は諦めないぜ！

「ちよ…鳴葉さん！ いや、俺の名前は」

「ふえ〜、シユウっていうんだあ、私は唐草空音からくそくおとねだよ。宜しく〜」

この人もか… 紅龍のお姉さん改め、空音さんの中で俺の名前はシユウで認識されてしまったらしい。くそ〜。

「シユウはギルドに所属するらしいの。この後いつもんとこで酒盛りするとき、シユウも来るからあんたも来なさいよ。」

と鳴葉さん。 ほよー とよく解らない声をだして

「じゃあ自己紹介はあとでだね〜。皆にも伝えとくね〜」

という空音さん。 気の効くお姉さんだな、とか思ってる俺に

「さあ、行く… あ、すみません、行きましょう。」

と鳴葉さん。 鳴葉さんが空音さんに話しかける口調のまま言いかけて、訂正する。 早く堅苦しい他人行儀から開放されればいいなあ

どと思っていた俺には好都合だ。

「謝んなくてもいいですよ。なんか敬語とか使われると話じづらいんで。タメ口でお願いします。」

すると少し驚いた顔をして鳴葉さんは

「そ、そうですか？…では遠慮なく… 改めて宜しく、シュ…シュ
ウ…」

慣れない様子二度目の挨拶をしたあと、「な、なんか変じゃない？」と鳴葉さん。

空音さんと話すときみたいでいいんだけどなあ… でも、慣れない様子が初々しく目に写る。 可愛いなあ…

「じゃ、じゃあ行きましょ。付いてきて。」

と相変わらず慣れない様子の鳴葉さん。

じゃーまた後でねーっ と手を振る空音さん。

ギルドを出て、先を歩く鳴葉さんの後ろ、酒場までの道を歩く俺の思っ事はーっ。

今度こそ俺の正確な本名を覚えて貰っ事だけだ！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3859z/>

幻獣ぱれっと!

2011年12月18日01時52分発行